

## 橋本哲一先生退任記念座談会

出席者：

橋本 哲一（国際関係学科教授）

横田 洋三（国際関係学科教授）

西尾 隆（社会科学科助教授）

横田：それではまず最初に、先生はどういういきさつでICUに来られたか、その辺りのお話からお伺いしたいと思います。

橋本：それはね1953年、一期生が入った年の9月でした。旧制の一高時代、寮に新約聖書のギリシャ語を教えに来てくれた先輩がいてね、秋田稔さんですが当時東大の特研究生でした。教わった仲間には東神大の学長をした熊沢君とか鎌倉雪の下教会の加藤常昭牧師、それから関西学院大学神学部教授高森君などがいましたがみんな牧師になりました。それでその秋田さんが、まだ東大生だった私にICUの非常勤助手にならないかと声をかけてくれたわけです。ところで、後でお話するかもしれませんが、東大法学部に進学する前に、京大病院にお世話になり、東大病院に入院するという完全なスランプ状態だったんです。で、それが例の心身統一法ですっかり元気になったわけです。

横田：先生はその頃から心身統一法をやっておられたんですか。

橋本：昭和25年からです。だから私の人生の第一の転機は昭和25年5月14日、中村天風先生という偉い先生に巡り会った時、第二にはこの昭和28年9月にICUにインヴァイトされた時、そして最後は、昭和60年の夏、デラサール大学へ、わずか2ヶ月行ったんですが、その時非常に恵まれた宗教体験を与えられた時と三回ありました。その三度目の体験の折、「定年

後は神学校に行きなさい」という声を聞いたんですね。話を昭和28年9月に戻しますが当時の学務副学長はトロイヤー先生で、学部長はクライダー先生だったと思います。そして日高第四郎先生とか、小島軍造先生、それに長（武田）清子先生もおられたわけですが、このような人達から簡単な面接を受け、すぐその場で来週から非常勤助手で来て下さいとの申し出を受けたのです。昔は簡単だったんですよ。今は大変ですがね。で、お手伝いしたのは政治学のグリーン・ジョーンズ先生という方で、確かアイルランド系のアメリカ人でした。非常に早口でしゃべられる方でしたが、その講義のシラバスはもう実に詳しく歴大なもので、それをもとにして講義された後、学生のディスカッションの指導を主にやりました。で、昭和29年の春学期からはもう常勤助手になったんですが、その9月からデューク大学の大学院に留学することになり、丸三年半休職が許されました。

横田：休職というと、現在のいわゆるリープではない訳ですね。

橋本：その通りです。昭和33年2月に帰ってくるとすぐ4月から復職ということで、それ以来ずーっとICUにいるわけです。

横田：そのときは先生として戻られたのですか。

橋本：その通りです。一寸脱線しますが、実はICUの非常勤助手に採用された後、朝日新聞の入社試験に合格しちゃったんですよ。で、当時朝日の常務だった矢島さんに相談に行きました。この人は私の妹の友人の父親なのですが私にICU就職を強くすすめてくれ、自分の社に来いと言わなかったんです。それが岐れ道になりました。

横田：矢島さんはその理由を何かおっしゃいましたか。

橋本：いや、もう何も言わなかったです。私の顔を見てね、新聞社のような荒っぽい仕事をするよりもアカデミックな世界で静かにした方がいいと思う、とまあそのように認めてくれたんでしょうね、きっと。

横田：その時は助手でいらしたということですが、先生が、ファカルティー・メンバーになられたのはいつですか。

橋本：ずーっと後ですよ。

横田：そうですか。私が1960年にICUに一年生で入った時には、確か先生は講師でいらしたと思います。

橋本：はい、今と違って昔は講師以上はみんな教員で、教授会のメンバーでもありました。えーと、昭和34年になりますね、講師になったのが。

横田：1959年ですね。それならば符合します。私の入学が1960年です。で、その頃のですね、今先生、何人かの先生のお名前を出されたんですが、学生で先生の記憶に残っている一期生、二期生、三期生のころの人はいますか。

橋本：そうですね、やっぱり一期生の高山君なんか印象に残ってますね。それから二期の葛西さん。それに同じく二期の堀内伸介君。彼はね、入学式の後、ガーデン・パーティーで会って、泰山荘ですがね、一人でしょんぼりしてるんですよ。それで私が声をかけましてね、それ以来急に親しくなっちゃって、今はもう兄弟みたいなつき合いをしていますよ。

横田：今は、外務省の大使からFASID（国際開発高等教育機構）という団体の事務局長をしていらっしゃるんですね。非常に立派な方ですね。そうですか。

橋本：それから一期生には、今は東洋英和女学院の院長・・・

横田：あっ野瀬久美子さんですか。

橋本：そう野瀬さん、旧姓深井さん、それから旧姓稲垣早苗さんなどが記憶に残っています。

横田：そうですか。

橋本：先生としては、鮎沢先生も居られましたね。

横田：あの、ILO事務局におられてその後中央労働委員会の初代の委員長をされた方ですね。

橋本：それから三隅さん。三隅さんは私の母校の旧制神戸一中の大先輩なんです。ICUの学長をされた久武先生の方が後輩なんですよ。三隅先生は同郷意識のとても強い方で、兵庫県出身の学生、教職員のための県人会を定期的に、学内のお宅を開放してね、やっておられました。

横田：そうですか。

橋本：それから細木さん、遠藤さん、羽鳥さん、それに郵便局長をされた三木さんなど思い浮かびます。

横田：そうですね。

橋本：古典学の神田先生、それから英語学の清水先生。

横田：清水護先生ね、よく憶えています。

橋本：実は私は、ICUの社研、そして大学院行政学研究科を創設された蠟山先生に教えて頂いたのですよ。

横田：東大ですか。

橋本：はい。先生の国際政治特講というクラスに参加させて頂きました。それでこの蠟山先生と、先生の一の弟子辻清明先生、そしてその辻先生からも東大で教わった私という三世代がICUで同時に教えたことがあるんです。ところが、こいう立派な先生方に、その懐にとびこんでいって親しくして頂くことを敢えてしなかったのは、さきの中村天風先生というずば抜けた先生に巡りあったために、人間的にいて自分の師はこの方をおいて他にはないと思いこんでしまったからでしょうね。

横田：今、我々や学生から見ますと、先生はどなたとも仲良くやっておられるように思いますが。

橋本：つまりね、先輩の方々に寄っていかないんですよ。同輩や学生諸君とは仲良しになる。(笑)

横田：その辺は下から見ていると良くわかりませんけれども。先生は非常に温厚なお人柄でいらっしゃると思いますが。

橋本：で、この中村天風先生については、その生涯を紹介した簡単な伝記のコピーをみなさんに差し上げますが、生前の昭和天皇が先生付けで呼んだただ一人の人だったそうです。首相でも呼び捨てで呼んだのですが。今の天皇はそんなことはないでしょうけれど。この伝記に書いてありますが、先生は自分から進んでインドへ修行に出かけたのではなくて、アメリカ、ヨーロッパと軍事探偵時代の精神力を立て直すために、道を求めてそれが

得られず、持病の肺結核が極度に悪化して、もう日本に死に帰ろうとする途中、エジプトのカイロでカリアップ師というカルマ、ヨガの最高指導者に巡り会ったんです。そのカリアップ大先生はイギリスの王室に招かれてレクチャーをし、立派な自分のヨットでインドへ戻る途中だったわけです。ヒマラヤ第三の高峰カンジェンジェンガの麓のゴークという村でわずか三年ぐらいですが、天風先生の修行がつづけられ、その間にすっかり健康を回復したばかりでなくて、ヨガの秘法を会得することが許されたのです。

横田：なるほど。そういうことですか。

橋本：それでね、日本へ帰る前に中国で孫文の辛亥革命の手助けをして、一時は最高政治顧問だったそうです。

横田：その方がそういうことをしていらっしゃったのですか。ところで先生はICUの創定期からずっと今日までの歩みをいろいろな形で見てこられ、そして体験してこられた訳ですね。そこで、先生からご覧になったICUの創立以来の歩みというものを、細かい点についてはいろいろお話になりたいことがあるかと思いますが、重要なポイント毎に少しご説明頂けますでしょうか。

橋本：何しろね、最初はね一期生だけでしょ、150人ですからね、お互いに名前がわかっちゃってね、文字通りICUファミリーっていったですね。

横田：その時は、先生にしても学生にしても、ICUはできたばかりの大学で、その当時はおそらく国立が圧倒的な地位を占めていましたから、私立で、ミッション系で、小さな大学で、そういう意味で先生や学生の中で一種のはずれたところにいる存在だっというような意識があったかと思いますが、その辺の雰囲気をちょっと教えて頂けますか。

橋本：その辺については、湯浅初代学長が、ICUはuniversity of tomorrowであって、もう一つの東大をつくるのではないと口ぐせのように云われ、これが徹底していましたね。そして例えば篠遠先生とか神田先生とか、東大を途中で退官されてICUにいらした。それから経済、経営関

係では一橋から、社会学・人類学の分野では都立大からという風に、トップ・クラスの大学の先生方が、明日の大学形成を旨としてICUに来られたわけですね。つい最近まで政治学関係は全部東大出身者だった、しかし決して東大閥にはならなかった。

横田：そうですね。

橋本：ですからそういう点でなんかこう東大と競争するとかね、そういうような意識はなかったですね。

横田：全く違った価値観に基づいて作られた大学という、そういうイメージだった訳ですね。そういう意味では先生も学生も燃えていた訳ですね。

橋本：そうです。ただし、将来どうなるか保証もないんですね。学生は。

横田：ですからまたそういうことを気にしない学生が集まったともいえますね。

橋本：そうかもしれませんね。

横田：ちょっと私事にわたるんですが、その頃和田清という東洋史の先生がICUに関わっていたことがあるんですけどもご記憶ありますか。和田清、「きよし」と書いて「せい」と読むんですけども、東大の先生なんですけどね。

橋本：はい。まあ親しくお会いすることがなかったんで詳しいことはわかりませんが。とにかく非常勤講師としても一流の方にやっぱり来て頂きましたから。

横田：確か国際法では横田喜三郎先生が非常勤講師でいらしてましたね。ですから確かにもう超一流の方々ですね。国際私法では、私の学生時代では江川英文先生、これももう超一流の方ですけれどいらしてましたね。今その和田清っていう名前をだしたのは、私の親戚だったものですから。

橋本：あーそうなんですか。

横田：その後のICUの歩みのところを少し年代をおってお話を伺いたいと思います。安保の時期がその次にくるんですか、時代的には。先生がアメリカからお帰りになったあの頃は、ICUはどんな雰囲気だったのですか。

橋本：あんまり学内は政治的ではなかったんですね。一番まあ問題になったのは68-9年の学園紛争ですね。

横田：60年の安保の時にはICUの中は割合に静かで、ICUの学生も外ではやったかもしれませんが、ICUの中では余り大きな問題にはならなかったということですね。

橋本：三鷹駅位までデモかなんかはやりましたね。それでもね。

横田：でその後のことですが、実は私は60年から64年まで学生でおりました。その64年、卒業の年に学費値上げの、おそらくICU史上初めての学生による授業ボイコット、座り込みそして一部の学生によるハンストがありました。

橋本：そうでしたねえ。

横田：あの頃のことは、橋本先生には何かご記憶がありますか。こんな学生がこんなことをやっていたというような。あまりその時学生からの接触というのはなかったんですか。

橋本：その頃にね、スチューデント・ファカルティ・カウンシルというのがありましたね。

横田：ああ、ありましたね。

橋本：それで、学生とファカルティの代表がいろんな問題について話し合い、それを大学の行政部が参考にするという形でしたね。

横田：そうでしたね。先生はそれにファカルティの代表で入っておられたんですか。

橋本：入っていました。

横田：ああ、そうですか。そこでどんなことを話し合ったのですか。寮のこととか学生生活に関するいろんなことですか。

橋本：それもあつし、多少政治的なイシューについても、政治運動をすべきかどうかとかいうことなども議論した記憶があります。

横田：ああ、そうですか。ただ全体としてはそんなに過激な学生がいて先生達が非常に困るという状況はその時にはなかったんですね。

橋本：ありません。それが出来たのは学園紛争のいわゆる68-69年ですね。その前に生協闘争とか、能研テスト闘争があり、それをふまえて最後は本館・D館占拠になったわけです。

横田：いわゆる、三項目闘争に始まる学園紛争ですね。これは日本中の大学が巻き込まれた、あの学園紛争にICUも入ったということですね。

橋本：その時教授会が真っ二つに割れて、いわゆるハト派は学生ととことん話し合い、説得して占拠を解こうとしたのに対し、タカ派は、彼らは不法なことをやってるんだから機動隊の力を借りてでも排除すべきだと主張。これは湯浅理事長の意見でもあったわけです。

横田：鵜飼先生はハト派でしたか。学長でしたよね。

橋本：その時にはもう辞めておられましたね。

横田：鵜飼先生それより少し前の能研闘争の時に学長をしておられましたね。あの時もやっぱり学生が建物を占拠したんですよね。ただその時は機動隊を入れて学生と対決というような雰囲気ではなかったと聞いています。ただどういいうきさつだったかは、その頃私、外の大学院に行っていましたので、詳しいことは知りませんが、いろいろないきさつがあって鵜飼先生とその他数名の先生がお辞めになったのですね。ですから今橋本先生がおっしゃっているその後のいわゆる三項目闘争、これがまあある意味でいちばんICUが危機的に難しい問題に直面した時といえますね。授業も69年4月からずっと行われぬ。実は私はその年に専任講師としてICUに入りました。ところが着任したときには授業は行われていませんでした。ただ東大はあの時入学試験をしなかったのですが、ICUはやったのですね。あの辺はどういいうきさつだったのですか。

橋本：当時、先程お話しした秋田さんが学長代理、長先生が教養学部長だったのですが、長先生は大衆団交などのこともあって渡邊現学長が、教養学部長代理をつとめ、今中央大学の教授をしている丸山圭三郎君が教養学部副部長代理、それから同じく小塩節君が学生部長代理、それで、私が学長代理補佐をしたわけですが、このハト派のメンバーには絹川さん、鎌島さ



ん、岡野さんなども加わっていました。これで秋田さんは責任をとるという形で、北星学園大学学長に転出、当時テレビにも出ていわば看板教授だった、丸山、小塩両氏は中央大学に移ったわけです。そして理事会によって免職の処分を受けたのが、常勤講師と常勤助手、二人とも非常に優秀な人たちでしたけれどね。

横田：もう一人二人、これはお名前を出さなくてもいいと思いますがお辞めになりましたね。

橋本：そうでしたね、その人達はそうではなかったのですが、免職処分を受けた二人は、ハト派というよりは、もう全共闘べったりだったんですね。で、当時のICU全共闘は革マル系でしたが、学外の革マル組織からの指示で行動してはいなかったようです。彼らは大衆団交の席上でもヘルメットをかぶって派手にふるまいましたが、決して暴力は振るわなかったですね。さきに棍棒をふるったのは機動隊、湯浅元学長とは、私の両親が同じ組合教会系統のクリスチャンとして親しくして頂いておりましたから、先生が関西にいらした時には、家に泊まられたりしました。その湯浅さんから機動隊が入って一応騒ぎがおさまった後、「君の首も危なかったよ」と云われました。教授会が両派に分れたその時から、何となく教授会仲間の間がしっくりいかなくなり、それは相当尾を引くことになりました。

横田：そうですね、確かにそういう面があったと思います。その後先生の長いICUでのご経験の中で、やはり三項目闘争に始まるいわゆる全共闘の紛争ですね、68年の終わり頃から70年近くまで続いた、それがまあやはり一番大きなできごとというか、ある意味でICUが大きな危機に直面した状況ということになりますか。その後数年して例の学費スライド制の問題が起こってきましたね。

西尾：私入学した年です。74年です。73年末の願書受付のころにその話があって、受験票と共に田淵副学長のICUの財政難と学費値上げについてのパンフレットが送られて来ました。私の修道高校のときの一年先輩がすでに入学していて、お前たちのために自分たちは反対してやってるんだって。

橋本：ああ、なるほど。そうすると西尾君たちはスライド制の適用を受けた最初の世代ですか。

西尾：そうです。12万円から始まったんです。

横田：ものすごい格差なんですよ、その、しかも年々上がっていく訳でしょう。

西尾：倍額、6万から、卒業の時は24万でしたからね。

橋本：で、その一年前に入った人は、一年留年した場合には・・・。

西尾：いや8年間いても6万円ですね。だから上級生には留年が少なくなかったですね。おもしろかったのは一年生は全然運動しないんです。値上げが適用されない先輩たちが学費闘争やっていたのはちょっと奇妙な風景でしたね。

橋本：なるほどね。まあ、経済的な理由だけで、能力も意欲もある学生がICUに来なくなるのではないか、という心配だった訳ですね。そういうことに対しては、奨学金を充実させて対応しますとというのが大学側の説明でしたね。

西尾：それでも私のころは、まだそれほど高いっていう実感はなかったんですけどね。四年生の時で24万。また、ここまでずーっと続くとは思わなかったですけどね。

橋本：でね、前に戻りますけどね、何しろ図書館も本館の中にあるでしょ、周りは草ぼうぼうでね。ですから年に一回ですけどキャンパス・クリーンアップ・デイっていうのがありましてね、これには教職員、学生全員が参加しました。

横田：湯浅学長も率先してゴミ拾いをやっていましたね。

橋本：そしてその終わった後、ICU ミルクが全員にただで支給されたんです。あのクリームの濃いやつ。

横田：そうですね。ICU ミルクなんて憶えているのは卒業生の中でもだんだん少なくなってきました。今の学生なんか全然そんなの知りません。そこでICU ミルクっていうのはどういふものであったかご説明いただけま

すか。

橋本：つまりね、ホモジナイドされてないでしょ、だから上の方にクリームがこんなに・・・。

横田：そうですね。ICUにだいたい牧場があったんですよね。20頭ぐらいですか、牛がいて、今の野川公園のあたりで放牧されていた訳ですよ。

西尾：あれは創立の理念の一つに、農村厚生を重視するというのがあったそうですが。

橋本：そうですね、それで寄付してもらった訳ですよ、牛を。

横田：まあそれも経営上の問題があってゴルフ場に変った訳ですよ。時代の要請ということもあったと思います。それからもう一つ言われてたことは、衛生管理があつた規模だと十分にできないということで何かあった場合、責任問題だつて言うこともあったと聞いています。要するに、片手間に牧場経営してましたからね。それは非常に心配だということで、牧場は無くして、ゴルフ場の方に切り替えた訳ですよ。

橋本：今日の昼、一期の千葉泉弘さんとちょっと話す機会があったんですが、あの桜並木の北側の木は彼らが植えたんですよ。

横田：そうです。なんか写真を見せてもらったんですけど、植えてる学生のちょっと高いぐらいの苗木ですよ。ですからあれがこの40年ぐらいの間にあれだけ育つてすごいもんですよ。で、その後は比較的ICUは学生との関係では・・・。

橋本：学生会がつぶれてなくなっちゃったでしょう。で、学生はいろんなサークルでやってればいいんで、必要に応じてクラブ代みたいなものをやればいいんで、別に学生会が欲しいっていうのはね、まあ時々出てくるんですけど、それがうまくいかないんですよ、その正式の学生会を作るのが。ですから大学当局と学生が正面から対決するなんていうことはほぼなくなっちゃったんですよ。

横田：その頃からなくなりましたですね。

橋本：ただし今後ね、例のスポーツ・クラブハウスを建てたりする時なん

かは相当学生諸君と話をしましてね、あれは将来いろんな建物を建てるときのためにいい例を作りました。今度D館も立て替えますし。

横田：あの手続きは、まさに橋本先生お考えの民主社会主義の、特に民主的手続きを重視して、学生を含むいろんな人を物事の決定に参加させるということを実践したケースという気がします。そこでちょっとテーマを先生のご専門の方に変えさせて頂きます。私は橋本先生のご講義も取らせて頂きました。先生はおそらく一貫して民主社会主義の理念を、講義の中でずっと説いてこられたと思います。その中身は時代によって少しずつ変化したということもあるかと思いますが、そのようなお考えに至った学問的な経緯ということについて私どもも関心があるんですけれどもお話頂けるでしょうか。

橋本：これはやはり蠟山先生の影響でしょうね。民社研（民主社会主義研究会議）の大御所でしたからね。

横田：蠟山先生の直接的なご指導の影響ですか。それとも先生のお書きになられた本や論文をお読みになっての共感ということですか。

橋本：まあ主に後の方でしょうね。それから関嘉彦さん、そして防衛大学校校長をされた猪木さんの書物には影響されましたね。

横田：ところで、先生のお考えになっている民主社会主義というものを、もう一度分かりやすくご説明頂くとどうということになりますでしょうか。

橋本：そうですね。つまり社会主義をマルクス主義的な社会主義だけだっ  
て考えることは間違いなんです。もともと社会主義という言葉自体、共同して何かいいことをするという言葉でしてね、そしてイギリス辺りではフェビアン・ソーシャリズムとかありましてね、とにかく社会の中に不平等があってはいけないとか、みんなで助け合いましょうとかというのが最も基本的な社会主義の考え方ですね。そしてそういう不平等を無くした社会を作るための手段が暴力であってはいけないと主張する。非暴力的な手段、つまり議会を通しての、革命ではなくて改革だということですね。だから当然その改革は当面は体制内改革だということですね。だからその体

制内改革の過程で暴力は出てきませんから、人権の抑圧とかない訳なんです。まあ、わたしには、キリスト教的背景もあるもんですから、暴力とか憎しみの原理に立つ政治運動はとるべきでないとの思いが強いですね。但し一方資本主義がいろんな矛盾や問題を持っているっていうことも事実ですね。だからこれはもう明らかに修正する必要があると民主社会主義者は確信している。ただその修正をする場合も、いきなり国家権力で私有財産を取り上げるというような形でなく、合法的に例えば税金を高くするか、それから経営資本家が自発的に社会的な負担に応じるとか。まあその他いろんなことを考えてる訳なんです。民主社会主義ではなく社会民主主義となると、まだちょっとマルクス主義が残ってるんですね。第二次大戦後西ドイツの社民党の場合、それと訣別してはっきり民主社会主義に変わりましたね。民主社会主義のもとでは、民主主義が目的でありかつ手段でなければならない、つまり民主主義的な手続きを通して、民主主義を実現する。しかしそれは社会主義が求めてきたものをなかに取り入れた形を取る。つまり平等ですね。だから強いて言えば民主主義は自由ですね、社会主義は平等。それで、自由と平等どっちを取るかということになれば民主社会主義者は自由の方を取るんで、その自由の基盤の上に平等も実現していこうということですね。まあ大ざっぱな話になりましたが、日本の民主社会主義の党、民社党は全然伸びないんですね。つまり白か黒かはっきりしない。灰色なところがあると、それはあまり大衆に受けないということですね。

横田：ヨーロッパ、とくに北欧では、そういう政党が政権を取ったりしていますね。ところが日本では第二の党、つまり第一野党になるということもなかった訳ですが、先生の日本の政治に対する分析からいうと、どこにその理由があるとお考えですか。

橋本：まず、戦前ですが、西欧諸国のような意味における政党が発達してなかったですね。確かに政友会、民政党という形でちょっと二大政党制的なものがありました。しかし肝心の政党の自由、政治の自由はないです

ね。そして、天皇制があり、官僚支配っていうものがあった。で、第二次大戦敗戦後初めて本格的な政党政治になるかと思いきや、パージが解除されると、古い政治家が多数保守党にカムバックし、それから優秀な官僚が保守党に入りました。そして片や保守政権がとってきたそのサンフランシスコ講和体制、日米安保体制ですね、これにもう真正面から反対するだけで、具体的、積極的なヴィジョン、対応策を持たない社会党が第二党でしょ。まさに  $1\frac{1}{2}$  政党制ですわね。で、こういう結果が続いてきたことについては、まだ国民の間に自分たちが主権者であって政治家も官僚も、極端に言えば天皇もパブリック・サーバントだという意識が確立していないという事実があるのではないか。そこで、そろそろその一番基本になる主権者意識というものを、国民のすべてが赤ん坊の時から持つようにしなければ日本の政治はだめだというのが最近の私の持論なんですけどね。それと同じような仕方です。平和教育、環境教育も、乳幼児期から徹底して行ってもらいたいですね。

横田：それは最近先生が書かれたものの中で、一貫して述べられている点ですね。私もその点大変感銘を受けてるんですけども、これは私の専門外のオブザベーションなんですけど、日本では民主社会主義、社会民主主義いずれもですね、どうも煮えきらないというか、中和的な考えだということで、思想としては人気がないのですね。若い人の人気もないし先輩の方の人気もない。ところがですね、結果として起こっている日本の政治というのは、非常に民主社会主義的じゃないでしょうかね。革命が起こるといふことはありえないし、で、議会を通して、実際にやってる政策は何かと云ったら、それは完全な資本主義、自由主義、保守主義ではなくて、かなり福祉の政策を取り入れてやっている。これはおもしろい現象ですね。

橋本：だからねえ、民社党が言ったことを全部自民党が取って、政策的に実現しちゃったんですね。そうするともう戦いようがない訳なんです。

横田：西尾さんは行政学がご専門ですが、その立場から橋本先生にご質問していただけますか。

西尾：そうですね。私が入学したころは橋本先生が大部分の政治学関係のコースを持たれていたんです。どのくらい全部でされましたか。十科目ぐらいでしょうかね。

横田：橋本先生は、政治学関係の分野で政治学、それから国際政治もされてますね。それから比較政治も二つぐらいやられましたかね。あと東南アジアの政治的社会的発展もご担当になってますね。

橋本：一度やったことがあります。それから政治理論。政治思想はしませんでした。

西尾：だからいろんなものを聞いた憶えがあって、どれをどのコースで聞いたかよく憶えてないんですが、ある意味では僕は橋本先生のイメージはこのジェネラリストというか、オールラウンダーみたいなどころがあるんです。先生が講義されてですね、何と言いますか一番力を入れられたコースは。

橋本：最近では政治過程ですね、選挙制度を含むね。だからもし私が大学にいとすれば、そっちの方で少し本格的なものを書きたいなとは思ってたんですけどね。何しろ私はもう寡作ですからね、書かないから。だからプロモーションの時には、先輩の先生方、それから横田さんにも大変御苦労をおかけしたと思います。

横田：しかし、他方ですとね、橋本先生は学内の行政の面では大変大きな功績を残されました。また、同時に、先生が指導なさった学生の数も大変なものですね。多くの卒業生がICUの学生時代と先生とを重ね合わせて記憶しているということ、この面での橋本先生のICUにおけるご貢献というものは、大変大きいと思っているんです。卒業生に会いますと、橋本先生はまだいらっしゃいますかっていう質問が必ず出てくるんです。橋本先生にはICUに対する関わり方について何かフィロソフィのようなものがあったのでしょうか。それともむしろ成り行きで学生が来たのでみんな面倒を見てあげたという感じだったのでしょうか。

橋本：そうですね。

横田：とにかく私の記憶ではもう毎年10人ていうのは少ない方でしたね。いつも15人から20人の卒論学生がいましたね。まだ学生数が1000人以下の少ないところにそういうことでしたから、これは驚異的なことですね。

橋本：これは特に最近になってのことですが、私の研究室を訪ねる学生諸君が誰でも、やって来た時より、はるかに元気になって帰ってもらいたいという気持ちが強くなっています。その辺に心身統一法がかかわってくるんですけどね。つまりどんな場合でも消極的な言葉を使わない。消極的な言葉を使わないようにするためには、潜在意識の観念要素が積極化されねばならない。潜在意識領の観念要素が積極化されれば、実在意識領での思考作用、感情作用が積極化され、言葉も積極的な言葉しか使えなくなる。それでは潜在意識領の観念要素を積極化するには具体的にどうすればよいのか、その実践方法について私からの簡単な説明をきくだけで、ほとんどの学生諸君の顔つきが明るくなるのを体験しました。ですから、心身統一法は、自然と文化の世界において最高のものの一つだと確信しています。しかし、その自然、文化の次元をこえた、永遠の次元にはこれは通用しない。それは信仰の世界、超越、絶対の世界ですから。私は昭和25年にこの心身統一法の天風会に入会したのですが、それより先、昭和19年に洗礼を受けたクリスチャンでもある。イエス・キリストを通してのみ与えられる神の恵み、これは絶対無条件、人間の努力、能力、功績などに全く関係ないんですね。いわば絶対他力の世界。ところが心身統一法の方は、教えられたことを熱心に実行し続けられない限り、効果は得られない。つまり、ただそういうものがあることを知ったり、信じたりするだけではだめなんで、それを熱心に実行しつづけなければならない、いわば自力の世界ですね。そこで絶対他力と、自力、これら二つの世界をどう調和させて理解すべきなのか、というのが実は天風会入会以来の未解決の課題だったのです。それが今から6年前の夏、フィリピンのデ・ラ・サール大学へ出講した折、しかも聖書のある箇所を通して、その課題解決についての示しが与えられたのです。それは新約聖書、ヨハネによる福音書10章の16節とい



う箇所です。それによって私のキリスト信仰が確かめられ、同時に、その確信の故に、ほかのいかなる宗教の、純真でまじめな信者の方々に対しても、本当に寛容であり得る、ということが示されたのです。絶対の確信と信仰的寛容の両立といってよいでしょう。ですから、一部のクリスチャンは仏事に参加するのはいけないとか、お宮やお寺に行くこと、そのことが偶像礼拝であるとして、それを禁止するようですが、私はお寺やお宮へ行く必要がある場合、そこでイエス・キリストのみ名によって、神のゆるしとあわれみをお祈りしてくるんです。クリスチャンではなかった恩師天風先生のためにも祈れるようになったわけです。

唯一のまことの神から与えられる一般の恵みと、特別の恵みのうち、一般の恵みの方は、信仰とは直接の関係なしに、無神論者にも与えられ、学問、芸術、その他いろいろな世界にそれは豊かに与えられています。つまり自然と文化の世界にみちみちた恵みです。しかしその恵みを受けるには人間の努力を必要とする。しかしそれらはすべて神からの賜物でもあると、信仰者は信じ、理解します。ところが特別の恵みの方は、我々の努力とは無関係に、絶対者たる神が、主権的、一方的に与えて下さるその愛と恵みを、ただ素直に感謝して受け入れさえすればよいもの、そして勿論これも神からの賜物。これらの両方をともに感謝して頂戴し、そのめぐみの中に生きるべきである、という風に、神の一般恩寵と特別恩寵との区別、その統合調和という形で、すっきり整理がついたというわけです。

西尾：ああ、全く同感ですね。その境地には達していないですけど。

横田：でも、それはよくわかりますね、おっしゃることは。

西尾：私もアメリカに行って合気道とかヨガとかやってる人に何人か会いました。今、向こうでは道場が流行っているんですね。心身統一法には会わなかったですけども。で、そういう人たちの中にも決してハッピーじゃない人たちがいて、ただこの人たちに信仰があれば救われるのに、全部自分自身のトレーニングとかディシプリンで救われようとしている、そういうところがあると思いますね。だから、一つヨガでも何でも危険があ

るのはその辺だと思うんですが、何かどこかで絶対的な信頼感というのを持っている、そういう修業や努力が生きてくる気がしますね。ただ僕も家が仏教なものですから、最近両親が死んで法事なんかある訳ですね。仏壇に向かってイエス・キリストの神に祈ってますけど、それを批判する人がいるんですね。墓を守ることは誤りであるとか、祖先を信仰する、ものを信仰するというのは聖書的でないと言うわけです。まあ私は、そういうつもりは全然なくて、気持ちよく墓を掃除するとか親を偲ぶとかですね、最近その辺は自由な気持ちに整理できましたね。

西尾：ところで、先生はクリスチャン・ホームにお生まれになったんですか。

橋本：母がクリスチャンだったんです。で、父はね、69才になって洗礼を受けました。

西尾：昨日実は渡邊先生を東大病院にお見舞いに行ったんですが、ちょうど渡邊先生と古屋先生と橋本先生とは、同い年でいらっしゃるんですね。

橋本：寅年。

西尾：何月でいらっしゃいますか。

橋本：古屋さんが9月、そして渡邊さんが10月、私が12月。ですから私が一番下ではあるんですね。

西尾：渡邊先生から昨日は、なぜか昔話が出て、自分たちの青春というのとはなきに等しかったと。十代後半の多感な時代が戦争で、物質的にも貧しいし、何よりも敗戦で価値観がひっくり返ったと。そういう意味では何か戦後の人生は儲け物という気持ちもあるけど、本を読んでいて、幸せな学生生活というか、それなりに苦しくても平和な学生生活を送っている話に出会うと、非常に憧れというか、うらやましい気持ちがするといわれて、何か原体験のように良くも悪くも後を拘束しているようなことをおっしゃられましたね、ああ、なるほどその世代はそれは特別だろうなってなことを思ったんですが。

橋本：ひもじい思いをしましたね。それからいつ死ぬかわからんというこ

とで、だから勤労働員で工場で働いて帰って来ても、寝る前に岩波新書の一冊ぐらいは必ず読んでましたね、どんなに疲れてても。まあ。今にして思えばなつかしい体験ですけどね。

西尾：あの、終戦を迎えられた時は、先生いくつでした。

橋本：満で19かな。

西尾：19ですか。19というのはある程度価値観が形成される時期で、それまでに天皇制国家のイデオロギーが吹き込まれたかと思いますが、それはいかがでしたか。

橋本：旧制の高等学校の生徒はね、人によって違うでしょうけど、そのおしきせの軍国主義の信奉者じゃなかった、大部分が。だから負けてもけろっとしてました。むしろ解放感の方が強かったですね。ところで最近ね、ERBと本館の間の自転車置き場を整理している二人のおじさんがいるんですよ。

西尾：そうですね、私の研究室はちょうどその真上二階なんで、声がよく聞こえててですね、女学生とおじさんの会話が何か感じいいんですね。空気注ぎを貸したり、ちょっとした修理とかやっています。

橋本：あの人たちに言わせると、ICU生は全然マナーがなってないということらしいんです。

西尾：どういう方たちなんですか、あの方々は。正職員ではないですよ。

橋本：もちろん正規の職員ではなくてパートの方ですよ。だけどあの一人的方はICU生を三人ほど家に置いているそうですよ、下宿としてね。

西尾：なかなか大学でああいう会話っていうのは聞けないもので、ちょっといいもんですね。おじさんたち、割と忙しく修理やら何やらいろんな仕事があるもんだなと思いますよね。まあ、マナーがなってないっていうのはこの前教授会でも議論がありましたけれども、昔はどうでしたでしょうか。マナーというのは、先生方はやっぱり学生にそういうことも含めて以前は指導されてましたかね。

橋本：いやその必要がないくらい、家庭のしつけがいい学生が多かったで

すね。これはもうね、小さい時にしつけなきゃだめ。大学生になってから言ったってね、そう簡単にはいかない。よほどのコンバージョンかなんかを体験すれば別ですが。

西尾：いや、教師がどこまで、特に小学校と違って大学の教師がどこまで口出しすべきかという問題がありますね。さっき先生が言われて私が共感したのは、部屋を出てゆく時明るい顔をして行ってほしい。それはね、私も本当に実感があるのは、この春、私の助手をしてくれていた院生が亡くなったんですね。何を教えてもですね、難しい組織理論のことをやっても、命を失っちゃおしまいだっていうか。最低限どういう形でもいいですけど、命が大切であるとかですね、何か非常に大事なことを今の大学生は忘れてるかもしれないね。そういうメンタルなケアばかりやると何のための大学か、それは教会でいいじゃないかとか病院でいいじゃないか、あるいは家庭の仕事だっていうことになると思うんですけど。ちょっとそういうところがICUファミリーの頃にもいろいろあったと思うんですけど。教師と学生のインフォーマルな形でのいろんな接触が。今やっぱり希薄でしょうかね。

橋本：そうですね、それは言えますね。

西尾：二年間のアメリカ留学から帰ってひとつ実感したのは、救われてない学生が意外とICUに多いんじゃないかということです。そうしてそれは、もしかしたら、教師があまり救われていないということかなとも思いましたね。さっき橋本先生が、どちらかという上の方よりも下の方に目が行くといわれたんですが、それが意外と難しいことなんですね。やっぱりみんな上の方を、自分を引き上げてくれる人とか、自分を支持してくれる人というのを見てしまう。そういう人たちは基本的に上の人だから、そういうふうにならなくても上に目が行きますね。職員でも学生相手よりも上司とかということになるかもしれないし、研究者の場合には、学界の評価とかが一番気になる。だんだん大学の規模が大きくなったという問題もあるでしょうが、やっぱりそういう、大学内の人間関係が変わってきた

という実感はおありですか。

橋本：それははっきり言えますね。昔はね、上とか下とかっていうのはなかったのね。みんな横一線。まあその点湯浅学長なんかもいいお手本でしたね。クリスチャンというのはそういう生き方をするものだと思います。だから恥ずかしくない。(笑い)

西尾：先生、例えばクリスチャン・コードについて何かご意見お持ちですか。

橋本：ある程度はフレキシブルに運用すべきだけれども、もし守れたら守りたいですね。ただそれねえ、あんまり熱心にやるとほかのクリスチャン・スクールから全部ICUがいい人を取っちゃうことになる。これ一種のエゴイズムだね。だからちょっと割り切れないですね、この問題は。だけどこれをやめることは避けてほしいと思います。

西尾：一方でこのクリスチャン・コードを持ってればキリスト教精神が守られるかという、これがやや問題で、まあ学生がよく議論してますね。例えば私の留学中にある学生がプリンストンに遊びに来たんですけど、ミッション系の高校を出て、そこは非常にキリスト教の空気が強く、ICUに行けばさぞや、名前の中にCがあるんだから、濃厚だろうと思っていったら、その希薄さにびっくりしたというふうな言い方をしました。もし学生の実感としてそういうのがあるなら、これはちょっと問題で、今の制度が機能していないのではないかと、問題にしてもいいなという気がするんですけど。

橋本：だからファカルティの間にリバイバルが必要ですね。

西尾：えーそうですね。一種の宗教改革。

橋本：でもこれは押しつける訳にはいかないことですからね。それでも入学の時の新生生のうち、クリスチャンがだいたい10%から15%ぐらいね、平均しましてね。それがね、必ず10%は増えて卒業するんですね。だから何にもしてない訳じゃないですよ。(笑い)

西尾：そうですね。あれは一体何が効果があるのかと問えば、それはやっぱり空気みたいなものというしかない。今宗務部が検証作業してるんです

ね。で、何が学生の宗教的関心を変えたのかという項目を挙げさせているんですが、やっぱり何かアンケートでいわくいいがたいものがあるんですね。

橋本：で、古屋説によるとね、あるグループのメンバーの3分の1がね、非常にあることにコミットしていると、その3分の1には非常に影響力があるって言うんですね。だから寮なんかでも、3分の1がクリスチャンの場合はクリスマスの行事もキリスト教主義的だけれど、これが3分の1以下だと行事がセキュラーになってしまう。

西尾：そうですね、今古屋牧師は別格として除いて、霊的なリーダーがいるかどうかもまた問題かもしれないけれど、ウォース先生など半ば宣教師的な先生方が辞められて、どこらへんにあるのかちょっと見えにくくなっているという気もしますね。

橋本：でも、ラッカムさんなんかね。日本人では立川さん、鎌島さん、原さん、讃岐さん、大森さん、その他大学のチャペル・アワーを大切にする教職員の方々など。それから絹川さんはあの人流でね。私自身聖書研究グループを作らなかったのもちょっと残念だったですね。

西尾：聖書も旧約の歴史の書などは政治の書みたいところがありますから。是非政治学の教師を中心に聖研をやりたいところですね。

橋本：千葉さんと姜さんがね、そのうちに深大寺そばでも食べながらダべりましょう、と誘ってくれて、大いに楽しみにしています。

西尾：いいんじゃないですか。さっき姜先生と、橋本先生の任期はまだ半年ありますから、一度ゆっくり集まりましょうと話したのですが、一方でご定年とかいうことにならないとなかなかこういうふうにお話ができないという、ICUの忙しさという問題はありますけどね。でも、先生はお住まいも近くですし、これからも精神的にICUをサポートしていただきたいと思いますね。

橋本：今日はこのような機会をつくって下さって有難うございました。

1991年10月17日（木）メゾン・ドゥ・ヴァンにて